

未来への伝承

第196回

石枕いしまくら

— 弔いのための枕 — とむら

多くの人が、眠るときに枕を使っているかと思いません。枕は睡眠の質を向上させるために生み出され、現在は人が眠りにつくためのものですが、古墳時代には、石製の枕が古墳の副葬品とされることがありました。

今回紹介するのは、土浦市今泉から出土した土浦市指定文化財の石枕です。

この石枕は、横幅約30cm、縦幅約25cm、全高約5cmで滑石かつせきで作られています。頭を置く箇所周囲には二重の沈線があり、この沈線間に小さな孔が左右対称に15個あけられています。この孔は、「立花」と呼ばれる石製の飾りを挿すためのものです。石枕は全体が磨かれており、滑らかで精巧に作られています。

こうした死者に使われる枕は、弥生時代に出現します。古墳時代には、石製のものや土製のもの、石棺自体に枕を彫り込む一体型のものなど、バリエーションに富んだ枕が現れます。

この石枕は、古墳時代中期(5世紀)における霞ヶ浦沿岸部の常総地域において中規模方墳や円墳から多く出土する「常総型石枕」と呼ばれるものです。

「常総型石枕」のほとんどが馬蹄形ばていけいをしており、頭を置く箇所の周囲に立花を挿すための孔があけられています。また、使用される石材は滑石や蛇紋岩じょうもんがんなど柔らかいもので、関東地域北部などで多く産出されます。そのため、「常総型石枕」を使用した首長たちは、採石地との交流により入手した石材を使って石枕を作っていたと考えられています。

「常総型石枕」が多く出土するこの地域は霞ヶ浦などが広大な内海を形成しており、水上交通が発達していました。石枕は、死者を弔う際の儀礼に関係するものと考えられており、この地域の首長たちも同様の儀礼を取り入れていたことがうかがえます。

今回紹介した石枕は、上高津貝塚ミニテーマ展「身近な土浦の遺跡」で展示中です。この機会にぜひご覧ください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場
(029・826・7111)



今泉出土石枕

